龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

2013 Report from FD Salon of RUCED
13-2

龍谷大学　FDサロンリポート

自校史教育の現状と課題

― 立教大学に学ぶ ―

講　　師：豊田　雅幸　氏（立教大学、立教学院展示館設置準備室）
日　　時：2014年2月26日（水）15：15 ～ 17：15
場　　所：深草学舎紫英館2階　第2共同研究室

はじめに

私は、現在、学校法人立教学院の立教学院展示館設置準備室に所属しております。立教大学の自校史教育の科目は、兼任講師として担当しておりますので、本日は、科目担当者としての視点からお話しさせていただきます。

私の専門は、日本近現代史です。「立教学院史」には、『立教学院百二十五年史』の刊行が始まった1996年から関わるようになりました。編纂事業終了後は、新たに設置された「立教学院史資料センター」（以下、資料センター）に所属し、そこで、自校史教育科目である「立教大学の歴史」を2002年度から担当するようになり、現在に至っています。

1.「立教大学の歴史」のカリキュラム上での位置づけ

立教大学では、1997年度から「全学共通カリキュラム」（以下、全カリ）という教養教育プログラムが展開されています。現在、「言語教育科目」と共に「総合教育科目」が設けられていますが、その総合教育科目は４つの科目群からなり、「立教大学の歴史」は、そのうちの一つ、「立教科目群」に設けられています。立教科目群とは、「立教大学の学生として特に学んでほしい」科目群になります。

2.「自校史教育」の歴史

そもそも、立教大学で自校史教育が試みられるようになったのは、1997年度のことです。当時、全カリの責任者でもあった寺﨑昌男先生が、ご自身の担当されている「大学論を読む」（科目名は「現代の思想状況」）という授業で、立教史を講義されたのが始まりでした。その後、1999年度からは、「立教大学を考える」（科目名は「歴史学の多様性」）という授業が設けられ、2001年度から「立教大学の歴史」となりました。開講コマ数は、池袋キャンパ

スで1コマでしたが、2007年度からは新座キャンパスでも1コマ開講されるようになり、2012年度からは、池袋キャンパスは3コマになりました。

なお、「立教大学の歴史」とは別に、2003〜2012年度にわたって、「立教学院と戦争」という授業も展開されました。この点については、後ほどお話しさせていただきます。

3．授業の目標と内容

「立教大学の歴史」では、私自身の専門性に即して、「立教大学の歴史を、主に日本近現代史の視点から考察し、本学の歩みや特色を理解するとともに、歴史学的アプローチを身につける」ことを授業の目標としています。立教大学の歴史を学ぶとともに、立教大学で歴史を理解することをも意図しています。それは、極めて身近な素材である「大学」を通じて、近代以降の日本の歴史に触れることは、歴史教育としても有効だと考えるからです。

各回のテーマは、シラバスに書いてある通り、基本的に時系列でトピックを配置しています。

4．自校史教育の基盤

授業を担当してきて感じることは、基盤となる資料と研究の重要性です。立教大学を傘下にもつ立教学院では、過去三度にわたり、年史を刊行してきました。最新の年史である『立教学院百二十五年史』では、初となる資料集が刊行されました。これなくしては、授業を展開することは難しかったと思います。また、編纂終了後に資料センターが設置されたことも、資料を活用する際には大きな助けとなりました。

さらに、資料センターでは、資料の保管だけではなく、共同研究にも取り組んできましたが、まず着手したのが、戦時下に関する研究でした。この研究は、2002年度から「国際環境の中のミッションスクールと戦争―立教大学を事例として―」（研究代表・前田一男）というテーマで科学研究費補助金の交付を受けることができました。その成果は、老川慶喜・前田一男編著『ミッション・スクールと戦争―立教学院のディレンマ』（東信堂、2008年）として出版されました。先ほど触れた、「立教学院と戦争」という授業は、実は、この共同研究の成果を授業へフィードバックさせたものでした。

おわりに

授業では、大学の負の歴史についても、隠すことなく取り上げています。しかし、そうした歴史を知ったからと言って、大学を嫌いになる、という反応はほぼ皆無でした。むしろ、負の側面を含め、普段何気なく通っている大学に対する、素朴な発見や驚きが、大学への愛着・誇り・尊敬といった思いを抱かせるようです。私自身は、そうしたことを全く意図

してはいないのですが、自校史教育が、大学への帰属意識やアイデンティティの涵養に役立つというのは、確かなようです。加えて、学生の反応の中には、自身の学生生活や大学の存在意義を問い直すきっかけとなったなど、自校史教育のもつ可能性を示唆するものも少なからず存在しています。

現在、立教学院では、「立教学院展示館」の開館準備を進めています。この展示館では、立教学院の140年におよぶ歴史を常設展とする計画ですが、小学校から大学までの、立教学院に集う学生・生徒・児童の「自校史教育の場」となるべく取り組んでいます。

教養教育・学部共通コースFD研究開発プロジェクト『『大学論』と自校教育」（教学部）
研究代表者：上垣　豊　教授（法学部）

豊田先生を招くにあたり

2011年度教養教育科目特別講義として「大学論」（前期2単位、3セメ配当）が実験的に開講された。それから3年間FD活動を続けながら、試行錯誤を重ねてきた。2011年度には広島大学文書館に、2012年度には同じく広島大学の文書館と教養教育本部に出張した。今年度は3年間のFDのしめくくりとして、自校教育では先駆的な役割を果たした立教大学から豊田雅幸先生を講師に招き、あわせて本学での「大学論」の授業実践報告を行うことにした。

2011、12年度の2年間のFDを通じて確認されたのは以下の点であった。日本で自校教育が正課として初めて行われたのは、10数年ほど前の立教大学においてであった。以来、何らかの形で自校教育が行われている大学はかなりの数にのぼり、大学教育において市民権を得ているといってよい。本学でも自校教育科目をおくべきであるという議論が大きくなりつつある。だが、正課の科目として行われているところはまだ多くはない。そもそも学士課程教育の中での位置づけについてはいまだに定まっておらず、その目的や内容自校教育を行っている大学の間でも、一致していない。さらには、具体的な問題では担当者の確保が大きな問題になっているように思われる。

こうした問題意識のもとに豊田先生には、立教大学での自校史教育の経緯と現状をお話しいただいたうえで、自校史教育の目的、内容、カリキュラムの中での位置づけ、ほかの教養科目との関連、授業外での自校史教育の展開（立教学院史資料センターなど学内機関との協力・提携）などをご紹介いただくことにした。目的と内容については、自校（史）教育が大学への帰属意識、アイデンティティの涵養に役立つという議論についてどのように考えるのか、それと関連して戦争責任など大学の負の歴史をどのようにあつかうのか、特に詳しくお話しいただくようにお願いした。

豊田先生は期待に違わず、豊富な教育実践をもとに、わかりやすく立教大学の自校史教育の現状につ

い説明し、最後にこちらがお願いした問題にも的確にお答えいただいた。とくに立教大学の自校教育では大学の戦争責任の問題が重点的に教えられており、この点では本学の「大学論」の自校史部分（松倉先生担当）と内容も問題意識も重なり合うものであった。担当者確保の点では、立教学院史資料センターの役割が大きいことがわかった。広島大学や京都大学では文書館が授業担当を担っており、それぞれの大学の文書館なり史料センターが関与することが大事である点が、あらためて確認された。

参加者は13名と、最近のFDサロンのなかでは数が多い部類に入るとのことで、討論にも熱が入り、本学でも自校史教育に対する関心が高まっていることを示すものであろう。なお、当日行った「大学論」の実践報告はFD報告書にまわすこととしたい。

当日配布したレジュメ等は大学教育開発センターに保管しております。
ご希望の場合は大学教育開発センターまでお問い合わせ下さい。

FD センターリポートとは

大学教育開発センターでは、教職員間の交流の場として、各種の教育活動の経験や意見が話し合えるように「FD サロン」を 2002 年 10 月から開催しています。

大学教育開発センターの運営に関わる教職員が、話題提供者をコーディネートし運営されています。話題提供者のお話に耳を傾け、お茶でも飲みながら自由に意見交換等が行える機会として定着してきました。しかし、開催時間や開催場所の問題から、参加ができないとの声も聞かれます。そのようなことから、FD サロンでの話題を全学に環流させ、FD の取り組みを深めていくためにFD サロンリポートを発行しています。

FD センターリポート 13-2
発行日：2014 月 3 月
発　行：龍谷大学　大学教育開発センター

〒 612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67
TEL.075-645-2163　FAX.075-645-2190
http://www.ryukoku.ac.jp/faculty/fd/index.html